

## 序章 はじめに

余暇などを生かした伝統文化の継承や日本旧来の食生活などを重視する生活の形成は、現代社会を生きる者にとって、価値のある課題だ。それらに関与することを目指し、長野県中部信州木曽地方での伝統釣法であるテンカラ釣りに着目し、それを継承・教育する道具の在り方をその代表例として探り、江戸和竿手法やその他伝統手法でのテンカラ釣り用の和竿制作手法の調査を行った。

現代の問題として、民間行事や地域生活習慣などの伝統文化伝承の断絶の進行がある。そうした伝統文化に関わる製作者側の意識の変化が断絶の原因と考えられる。「道具と風習との関係がなくなったこと」に危機感を持たず、道具作りそのものの継続にこだわるのが原因で、道具自体の生産活動の元文化からの独立が起き、文化の断絶が発生したのではないかと。また、こうした文化の消失を道具や行事の商品化による「文化の消費」の問題もある。

道具を経ない伝統文化単独での維持は困難であり、しかし、伝統道具単独をつくるだけでは売り上げ重視の商品化が進んで肝心の伝統文化自体を見失いやすい。そこで、道具を作り出し売り出す側が道具に文化伝承の付加価値を付け、文化維持の視点を持ち、伝承に用いる道具の授受による非言語的、あるいは言語超越的な伝承保存や文化の継承の強化を製品製作に絡めて行うことが、効果的に伝統文化継続に役立つのでは無いかと考えられる。

テンカラ釣りを振り返ったとき、実際には木曽川の漁獲量は乏しく、この釣法は催事的に客人を歓迎し、あるいは何かしらの出来事で鮮魚を必要とした場合に行われたと考えられる。これは日常の職業的生業とは別に、催事的／祭事的場面で伝統的・副業的に行われる生活仕事「マイナー・サブシステム」即ち「遊び仕事」のようなものだったのではないかと推測され、この推測を元に遊び仕事としてのテンカラ釣具の制作及び試用、修理を行った。

制作に当たっては、江戸和竿手法の伝統的手法からスタートし、そこから、現代材料や現代手法を使うなどして、後世に残り得る「自らテンカラ釣りがしたくなる」道具作りを目指す

した。また、この制作物を自ら試用する他、タケフナイフビレッジの和式ナイフ鍛冶師複数名にも実際に試用して頂き、実釣でも木曾テンカラ釣りの釣法を伝承する成果を得た。

なお、本論文は、発表論文リストに記載した筆者修士論文のうち和竿に関する部分を元として、その後の研究成果などを加筆修正したものである。

## 第1章 遊び仕事とテンカラ釣り

### 第1節 文化の消費による伝承文化の断絶の危機とその地域継承の問題

本研究の背景となる現代の問題として、民間行事や地域生活習慣などの伝統文化伝承の断絶がある。今までは当たり前のように存在し、特に手段を講じることなく継続すると思われてきた各地域独自に特徴のある文化だが、残念ながら現代においてはそうした地域文化の継続自体が困難になりつつある。岡山の郷土玩具を調査していた岡本憲幸はこの継続の困難を「過去にも政治的・社会的文脈の中で再構築されて」きた、とそもそも過去の伝承が断絶再構築されたものであることを指摘し、そうした伝統文化に関わる民具製作者側の意識の変化を「(道具と) 風習との関係がなくなったこと」に危機感を持たず、道具作りそのものの継続にこだわることを「継承(そのものに) 価値を見出す、新たに創出された『伝統』である」として、その道具自体の生産活動の独立を、断絶の過程として示した<sup>1</sup>。

そうした変化の原因の一つとして、金谷美和はその研究で「文化の消費」を挙げた。金谷はそもそもこうした文化の消費は柳宗悦らの民藝運動に端を発しているとし「民芸運動は、『展示』することで、『民芸』という文化の消費形態をとった」と指摘した<sup>2</sup>。

また本研究に関する例では、本研究にアドバイスをを行った大川清一和竿師は本研究の制作指導の際、何度も繰り返し「今の若い和竿師は伝統工芸品を作って売ることばかりで実際に釣りをしないから、しなりの無く重い、使えない竿ばかり作っている。ちゃんと魚釣りに使える竿を作らなければいずれ誰も和竿など使わなくなる」と指摘し、和竿による日本の釣り文化継続への危機感をあらわにしている。

昨今、伝統工芸士などの行政支援制度が盛んであるが、これらもあくまでもこうした道具作りの「生業」を支える為の商業上のものであり、それらの道具を使った地域の文化そのものの継承には残念ながら関与しない。そのことは、福祉雑誌などで地域を越えた広域な就職支援の一環として「目指せ！伝統工芸士」等の就業特集を組んでいることから鮮明に伺える<sup>3</sup>。あくまでも職業、生業としての伝統工芸であり、土産物的な商品製作販売に終始し、伝統工芸品を使う元々の文化の伝承そのものには全く意識が向いていない。

しかし本来、伝統文化に関する道具作りとはあくまでも地域伝統文化を支え、そこで使われるための道具でなければ、単なる変わった土産物に過ぎず、一時的な飾り物としてやがて消失する運命にある。講習会的に文化継承を行ったとしても、それもまた観光客向けの観光ワークショップとして消化されてしまい、地域文化そのものの継承、そして、伝統工芸品の未永い継承に繋がるかは甚だ疑問がある。

そうした、単に伝統の見た目通りに道具を生産し、あるいは講習会のようなものをたまに開く程度で文化伝承があったとするのでは無く、道具の作り手側に、道具そのものやその組み合わせに伝統文化や世界観を伝える為の意図を含めることが必要ではないだろうか。

本研究においては、こうした商業的に道具作りが注目されていて、なおかつその道具を使った文化継承そのものが軽視されてきた地域文化の一例として筆者の出身地域である木曽谷地域につたわる「テンカラ釣り」に着目した。

この「テンカラ釣り」を支える道具を作成し、使う事によってテンカラ釣りの伝統そのものや、テンカラ釣りの世界観を自然伝承する道具の可能性を探ってみた。

## 第2節 テンカラ釣りとは、その実態

テンカラ釣りとは、エッセイスト山本素石の「山釣り」によれば長野県木曽谷地域に伝わる伝統釣法であり、竿と、道糸、テグス、毛鉤だけで溪流魚を釣り上げる、極めてシンプルな釣法だ<sup>4</sup>。近辺の遺跡からも同様の浮子のないシンプルな仕掛が出土しているところから、古代の釣りが毛鉤かエサ釣りかは不明にせよ、このシンプルな釣り方自体は古代から木曽

谷地域で行われてきた釣りである可能性が高い<sup>5</sup>。

パタゴニア社の「シンプル・フライフィッシング」等の紹介で、今や世界的に有名になったこのテンカラ釣りだが<sup>6</sup>、反面、その釣り方は日本国内ではメジャーとは言えず、有料釣り場においてもテンカラ釣りが出来る釣り場はまだまだ十数カ所程度なのが現状だ<sup>7</sup>。

山本素石や地元木曽福島の桑原玄辰、杉本英樹らは、このテンカラ釣りを木曽の伝統的専業漁業者の職業的釣法である、としてその著作物に紹介している<sup>8</sup>。

しかし、実際に訪れてみると、木曽川上流の実情は、増水時以外には川幅数メートル程度の浅瀬なら歩いて渡れる程度の溪流でしかなく、その水産資源は見るからに乏しい（図版 1）。支流など、いずれも勢いを付けて足を濡らさずに飛び越えられる程度の川幅でしかない。とてもではないが専業漁師が生活できるだけの漁獲量は存在していないようにしか見えない。事実、水産資源の大半を放流に頼る現在において、支流を含めた木曽川上流全域を管轄する木曽川漁業協同組合の全放流量は、平成 30 年度放流実績で、成魚：イワナ 2,840 kg・タナビラ（アマゴ） 2,690 kg（漁魚種合わせて 2 万匹前後）、稚魚：イワナ 66,000 尾・タナビラ（アマゴ） 175,000 尾程度でしかなく<sup>9</sup>、4~6%前後という渓流域の稚魚生残率を考えると稚魚の生存数は 1 万匹前後を想定していると考えられ、即ち総放流量は 3 万匹と推定される<sup>10</sup>。ここから、支流も含めた木曽川の漁業資源総量は翌年に要放流となる資源枯渇まで漁獲したとしてもこの 3 万匹前後に過ぎないと推察される。一方、近代開発が始まる直前、昭和 30 年時点での木曽郡の人口は 66,380 人、平成 26 年で 29,021 人であり<sup>11</sup>、テンカラ釣りが紹介されはじめたこの時期において、一人あたり二年に一匹、過疎の進んだ現代においても一年に一匹、地元の人間が地域の溪流魚を食べると現代の放流分を全て消費する程度に資源が枯渇する計算となる。放流量は、高度経済成長期以来長年流域資源を計算してその資源量を決定されているため、この数量が地域の水域で抱えられる水産資源量に限りなく近い数字だと考えて良いだろう。

江戸期でも、この地域は関所のある木曽福島を中心として街道街として栄えた。例えば、木曽川最上流の藪原宿は江戸中期で 1,493 人の人口であったという<sup>12,13</sup>。2019 年現在で同

地域の人口は 2,721 人なので<sup>14</sup>、現在の半分程度の人口であった。ここから、全期を通じて変動こそあれ、常に木曽上流域全体の街道筋で活発な旅行者を除いても 1 万 5000 万人程度の人口があったと類推される。この為、この漁獲量で地域全体の魚食量を支えるのは大変に困難だと思われ、山本らが紹介した「専門の職業的漁師」という存在自体が疑問に思える。実際、流域人口が 3 万人程度と、最盛期より半減した現代においても、木曽川流域は釣り場ガイドでも「放流直後の 5 月が狙い目の釣り場」とされていて<sup>15</sup>、流域全体の漁業資源量が地域人口と同じ 3 万匹の放流と非職業的遊漁とで釣り合う程度でしかないことが推測される。

また、これは経験論に過ぎない話だが、筆者の父方は当該木曽日義地域出身であり、その幼少時、昭和 50 年代までの記憶においても、木曽川での釣りは日常食ではなく、あくまでも客を特別にもてなすための料理である、という扱いであった点も合わせて指摘したい。

ここから、厳しい山間部であり、また木曽福島に閑所を置く街道街中心の経済でもある木曽谷地域において、生活のための水産食料は基本的に街道を通じて運ばれるものであり、テンカラ釣りはあくまでも副業的な漁業であったのでは無いかと類推される。もちろん完全な遊びというわけではなく、前述の山本らが言うように職業的漁師としての活動もあったものと考えられるが、あくまでもそれは本業の合間に行うものだったのではなかろうか。

### 第 3 節 遊び仕事としてのテンカラ釣りと、その伝承

事実、このテンカラ釣りは業務用に体系化され広く流布された釣法ではなく、杉本もその著作において昭和 30 年以前に「土地の古老より習った」と個人間での釣法の授受での伝承である事を明記している<sup>16</sup>。地域の生活インフラを支える職業的漁法であればこうした個人間での技能授受をもって伝承を行うのは考えにくいことであり、この点からも、このテンカラ釣りはあくまでも本業の合間に行われていた釣法なのではないかという推測ができる。

こうした、本業の合間に行う催事的／祭事的生活仕事は他所にも例がある。三橋俊雄らはこうした本業の合間の催事的／祭事的生活仕事を「遊び仕事」「マイナー・サブシステム」

と命名した<sup>17</sup>。

この「遊び仕事」の概念を提唱する一般社団法人農山漁村文化協会では、一例として、福島県郡山市石筵地区の「堰上げ」における、イワナのつかみ取りを挙げている<sup>18</sup>。地域住民が年に1度、水を枯らした用水路掃除において、一斉にイワナを手で捕まえ、それをごちそうとしてこの「堰上げ」で地域を訪れた来客と共に食する文化が紹介されている。木曾川流域のテンカラ釣りも、こうした、平和な来客時の催事として、つまり遊び仕事としての漁業であったのではなかろうか。

このことから、本論においては、テンカラ釣りを自然に継承・教育する道具を探究することとは、こうした「遊び仕事」「マイナー・サブシステム」としての世界観を持ち、食と遊びを中心とした命に関わる継承・教育を探究することの一環である、と考える。

#### 第4節 民具としての釣具

さて、テンカラ釣りの主役となる道具は、もちろん釣り竿だ。こうした釣具は言うまでもなく民間に広く使われてきた民具であり、生活に合わせ、様々なデザインを試みられてきた。例えば、江戸和竿手法での手の凝った釣り竿などには「民藝」の領域を感じざるを得ない。

しかしながら、「民藝」系の博物館や雑誌では、なかなかこうした釣具を見ることはない。これは、沢田の指摘によると、柳宗悦が提唱した「民藝」は、その関連博物館においては柳の思想を反映して「民藝館に刃物や武具を一切集めない」つまりは命を奪う道具を避ける、という平和主義をもっている事に起因している様子だ<sup>19</sup>。民藝の誕生した時代背景として大正末期～昭和初期という時代背景を考えれば、この平和主義が軍部の暴走や国家の拡大傾向を案じたものであることが類推され、事実、柳宗悦らが作ったアジア初の民衆文化博物館は、旧来からの伝統的日本国内ではなく、当時併合されて日本の一部となったばかりの現ソウル、当時の京城の「朝鮮民族美術館」であったところからもこの平和を希求する意図は汲み取れる<sup>20</sup>。

かように、柳宗悦らが民藝を唱えたのも、大正から昭和に移る激動期であり、第一次、第

二次世界大戦などの大きな戦争の繰り返された動乱期であった。振り返って今の時代を見ると、様々な人種差別発言がネット社会に溢れ、それを元に行動する各国主導者が現れるなど、同様に平和の危ぶまれる状況である。

こうした社会的類似点のある現代にこそ、新しい平和を訴求する民具制作が必要なのではないだろうか。そこで、本研究においては、敢えて柳宗悦らが民藝からそぎ落とした「命を頂く」部分を意識して、現代民具としての釣竿を制作した<sup>21</sup>。

## 第5節 道具による生活の形勢と伝承

敢えて柳宗悦らが避けた「命を頂く」視点を本研究に組み込んだのには明確な生活密着の意図がある。従来の民藝の枠組みを出た新たな民具の在り方を考えると、当然ながら道具や身の回りの物品は生活を形作り、それは文化や人間の生き方そのものを形作る、という点に注目せざるを得ない。奇しくも柳宗悦の民現運動と同時期に、同じ枢軸国である欧州ドイツにおいて、藝術学校バウハウスを中心としたデザイン運動が盛んになったのは決して偶然ではないだろう<sup>22</sup>。

しかし、民藝運動やバウハウスの時代を振り返るに、日独両国の藝術運動は政治的には実を結ばず、両国は第二次世界大戦へと突入し、両国の文化のみならず、世界の文化をも大きく毀損する結果となった。これは、道具による豊かで文化重視の生き方の形成が、地に足が付いていなかった、少なくともそうした寄与が力及ばなかったことを指し示す。

無論言うまでも無く、人はその食性上血を流して何者かを殺傷せずには生きられない。親鸞が語ったように「仏は悪人こそを救い」<sup>23</sup>、ネラン神父がバー・エポペ設立時に語ったように「神は最も汚れたところに居る」<sup>24</sup>。そうした民衆の生活を見捨て、敢えて生命を傷付ける可能性のある刃物を無視したことは、民衆を芸術文化から遠退けてはいなかっただろうか？

特に、魚を殺生することは、即ち日常の食事であり、それは民衆の生活そのものと言って良いだろう。現代でも、昨今各地の小学校でニジマスを用いて行う「命を頂く教育」が子供

達の情操教育に役立ち、命を大切にすることを伝える教育として大いに役立っていることは大変に広く知られていることだ<sup>25, 26</sup>。

地に足が付いた道具のデザインを考えたとき、生活の中でも、命を頂くという行為に関する部分を書かすことは出来ないだろう。

上記から、前述の長野県木曽谷地域に伝わる伝統釣法テンカラ釣りを選択し、その伝承をもって、生活を形作る道具の成立と伝承を目指した。

テンカラ釣りを、命を大切にし、文化を希求する「遊び仕事」として、現代やその先に伝える為の未来の道具として関連釣具の制作を行い、その釣具が伝統文化や日本旧来の食べかたなどを重視する生活の形成に関与し得ることとして捉え直して後述の制作に当たった。

## 第2章 和竿制作手法とテンカラ竿

### 第1節 和竿の種類と基本的な手法の差異

研究制作を行うテンカラ釣り竿には、日本古来の竿である「和竿」の手法での制作を選択した。

和竿とは、主に竹で作る日本古来の竿のことを指し、多くは漆、絹糸で補強をして作られる。代表的な和竿は地域ごとにいくつか残存しているが、この内、仙台竿、江戸和竿、京竿、庄内竿等が特徴的な作り方の差異で知られる<sup>27</sup>。

仙台竿と江戸和竿は、共に江戸時代から伝わる別の竹を継いで漆と絹糸で補強してゆく制作手法の和竿だが、仙台竿が竹の節を完全に取り去ってから火入れ加工を開始し、切り組みを漆補強する前に厳密に行って竹自体の段階で綿密にバランスを取り、糸巻き前に全体に麦漆で厚くコーティングした人工的な見た目に仕上げるのに対し、江戸和竿は竹の節をなるべく残し、切り組みは下巻きと瀬締めの後で行うため継ぎの段差がある程度残り、仕上げも拭き漆手法でなるべく薄く、あたかも継ぎを新しい節とする自然な竹に見えるように仕上げるのが特徴だ。

これに対し、京都に伝わる京竿は、製法こそ仙台竿に類似するものの、その人造的な工作を更に一歩推し進めて、現代のグラスファイバーのような先端から引き出す振り出し竿や、向きを変えて一本仕舞いする入れ子竿のような、凝った工作の竿を作るのが特徴的である。この京竿の工作の複雑さには西洋文化の影響が見られるが、京入れ子竿の存在自体は江戸時代から確認されている<sup>27</sup>。

庄内竿は上記の全ての和竿とは異なり、一本の延べ竿だった頃の空気を非常に強く残している手法と言える。本来切らずにそのまま使い、皮むきも漆塗りも糸巻もせず、ただ火と撓め棒と磨き布で加工するのが庄内竿の特徴だ。現代において運搬の都合がある場合には、一本の竹を切ってそれを真鍮の中子で継ぐ手法をとる。夏になるとホームセンターなどに出回る児童用の安価な竹の釣り竿などもこの庄内竿同様の金属中子での一本継ぎ手法をとることが多い。この子供の玩具にも似た原始性、素材性が、庄内竿最大の特徴といえる<sup>27, 28</sup>。

この他にも、郡上竿、横浜竿、川口竿、甲州竿などが知られるが、これらは全て江戸和竿の納入元や販売先などが主に明治期以降に独自に江戸和竿を真似て作り上げた竿である可能性が高く、江戸和竿の亜種と言える。特徴的には、郡上竿は厳しい地形で使用するために穂先を持ち手部分に仕舞うことを嫌って中抜きしないため全体重量が重いという特徴がある。横浜竿は船竿なので鯨を穂先に使う特徴があるが、基本的には地域の近い江戸和竿そのものであり、替え穂先と考えると現代竿に直結する面白さがある。川口竿は戦後期に盛り上がった比較的あたらしい竿文化であり、高度経済成長で高値になってしまった江戸和竿に代わる安価で庶民が使える江戸和竿を目指したものなので漆塗りが簡略化されていて絹糸も太く巻きが荒いという特徴がある。甲州竿はこれも江戸和竿の亜種であるが、郡上竿同様に中抜きを嫌い、その代わり、漆や糸巻きの使用量を減らしてやや軽く作る、といった特徴がある<sup>29</sup>。

今回は、木曽地方に伝わるテンカラ釣り向けの道具ということで、現地の釣り竿を調べ、木曽の地元で使われていた竿に近いと思われる、江戸和竿手法による制作を選択した。

釣り竿は水場で使う消耗品で、戦後、竹竿のライバルたるグラスファイバー製の竿が勃興するまでは修理を行わずに使い捨てに使用されていた経緯もあり現存数が少ない<sup>27</sup>。

そのため長野県木曽郡現地での江戸期の実物の現存例は多くは無いが、例えば浦島太郎の竿であるという伝承のある木曽川寝覚の床「臨川寺」の宝物館の和竿がある。これは浦島太郎伝承に合わせて3本の竿が後世に根元で接着加工されているものの、元は明らかに布袋竹に糸巻きを下地し、上に漆を塗った江戸和竿手法での竿であり、江戸和竿手法の竿が江戸期から当地で使われていた可能性を強く示唆している<sup>30</sup>。また、近隣の甲州和竿も江戸和竿に酷似した制作手法での和竿であり、江戸和竿手法でのテンカラ竿作りはあながち間違ったものでは無いだろう<sup>29</sup>。

江戸和竿による制作手法は、江戸和竿手法の元祖である東作の流れを汲む東光竿師最後の弟子である大川清一和竿師に学び、和竿手法での竿の制作に取り組んだ<sup>31</sup>。

## 第2節 テンカラ釣り竿の制作過程

前述のように、テンカラ釣りにテンカラ竿は欠かせない。このテンカラ竿は江戸和竿の手法での制作を試みた。埼玉県戸田市に工房と和竿教室のある大川清一和竿師の下、2018年7月より指導を受けた。大川和竿師は「東作」の高弟「東光」和竿師の最後の弟子であり、本業は歯科技工士ながら歯科機材と工房を使って和竿制作と和竿教室を副業としている。その大川和竿師から「東光」系統の和竿制作手法を学び、その手法での制作を行った。

制作は全て和竹と漆、絹糸をもって行い、最終的にはそうした伝統材料の制作物としたが、今回は前方研究的な試作ということで、穂先に関しては途中からカーボン穂先などの現代材料も積極的に利用を試みた試作も繰り返し行った。

江戸和竿の制作過程は、先の仙台市文化財調査報告書にも紹介されているように<sup>27</sup>、主に8段階に分類されることが多い。その工程は、1 伐り出し・晒し、2 切り組み、3 矯め・殺し、4 削り・巻き・瀬締め、5 継ぎ、6 調子、7 塗り、8 仕上げ、とされるが、江戸和竿手法での実作業とのずれを感じる。この流れを、図版を入れて実際の工程とともに紹介し

たい。

### 第3節 江戸和竿手法によるテンカラ竿作りの実際

#### ・工程1「伐り出し・晒し」(図版2)

2年育成以上の竹を伐り出し、その中から優れたものを特に選んで3ヶ月ほど乾燥させ、軽く火で暖めて荒撓めをした後、また3ヶ月以上乾燥させる。虫害のある竹はこの段階で見た目と音で取り除く。虫害の音は夜、帰宅前に電気を消してから耳を澄ませて確認する。

#### ・工程2「切り組み」(図版3)

晒して乾燥させた竹を選抜し、竿に必要な部分を切り出す。江戸和竿では一本の竹から切り出さず、それぞれの部位毎に最も適切な竹を、様々な竹の中から選んで切り出す。

#### ・工程3「矯め・殺し」(図版4)

再びストーブであぶって火を入れ、撓め木を使って撓めを行う。冷めた後の戻りを計算し、必要よりも多く曲げるのがコツとされる。また同様に両端を熱し、殺し木に末端をはめて真円に寄せて殺す(丸める)。熱による空気の膨張で竹を膨らませて中央部分も丸くする。

#### ・工程4「削り・巻き・瀬締め」(図版5, 6, 7, 8, 9)

先述の仙台市文化財調査報告書の江戸和竿解説部分など、多くの江戸和竿の解説ではこれを一つの工程としているが、実際に作業してみると、この工程が漆塗りと並んで和竿制作作業の大部分を占める作業であり、実際には3つの工程をばらばらに考える方が順当であるように思える。ここから、本報告書ではこの工程を詳細に紹介したい。

まず、節の芽の部分をヤスリで削り出す(図版5)。

次いで、節を軽くヤスリで整え、全体を紙やすりで整え、最後に紙やすりの裏面で磨く（図版 6）。

さらに、埋め木やヤスリがけで、継ぎ部分の雌型の形状を丸くし最終段階まで整える（図版 7）。

整えた継ぎ口の雌型部分に絹糸を丁寧に巻き上げる。この際、巻く糸が前の糸の下に半分潜り込むように巻くのが江戸和竿の軽さと丈夫さの秘密であり、最大の特徴である（図版 8）。

巻いた糸がほつれないうちに瀬締めを行う。瀬締め漆はゴミの多い低級な生漆だが非常に強力で、糸を強固に接着する。この瀬締めの際、ゴミを筆で継ぎ口に寄せながら塗るのがコツである。寄せたゴミは次回の塗りの前の紙やすりによる研ぎ出しで取り去る（図版 9）。

#### ・工程 5「継ぎ」工程 6「調子」（図版 10, 11, 12）

瀬締めが固まり安定した段階で継ぎ口の中側と差し込み部分を削り出す。江戸和竿は内側を薄く削り込む為、強度に不足がある場合にはここでもう一段瀬締めをすることも多い。

調子を見ながら少しずつ竹の内側や差し込み側を削り上げる。また、穂先や補持ちの仕舞いを持ち手などに工作する場合にはこの段階で内側の節のさらいを行う。

先ほどの工程 4 とは逆に、先の仙台市教育委員会の調査などでは分けて考えられているこの 5, 6 の工程は江戸和竿手法においては明らかに一つのまとまった工程である<sup>27</sup>、（図版 10）。

継ぎを進めつつ、工作、特に漆の浸透による変形とその戻りがある為 2 週以上時間を掛けて調子を取る。この段階で、テンカラ釣りの基本動作である「毛鉤の振り込み」をしやすいように、軽く、且つやや先調子に、しなやかに振り込める調子を意識して調整を念入りに行った。硬すぎる竿の場合には、軟調にしたい部分の節を抜くとその部分の軟らかさが増す。糸を巻いて瀬締めの場所を増やすと弾力性が増す。また、仕上げの方法にもよるがこの段階で、拭き漆の第 1 回をしておくことが多い。これは、拭き漆での漆の染み込みで調子（竿の曲がり具合）が大きく変わってしまうためだ（図版 11）。

調子をとれたところで竿の格段に尾栓を作る。調子を取る前では胴の中に節を抜くためのキリやヤスリが入らなくなってしまうため、調子を取った後のこの段階で尾栓を付けることになる。尾栓は上から色漆で塗らない場合には複数の竹や木を組み合わせた飾り尾栓が多い（図版 12）。

・工程 7「塗り」8「仕上げ」（図版 13, 14, 15）

ここで、江戸和竿最終作業で、最も時間のかかる作業でもある漆塗りをおこなう。

前述の江戸和竿に関する仙台市教育委員会の報告書では「塗り」と「仕上げ」は別の工程とされているが、これも実作業の体感的には同じ作業区分けでいいだろう。和竿にはマスキングの概念が無いため「泥棒掃除」と呼ばれる漆の塗り端の形状をナイフで切って整える作業を随時入れながら、作業を行きつ戻りつつ、時期によっては実際にその竿で釣って試し、都合十数回の塗りを重ねる何週間にもわたる作業になる。江戸和竿手法の特徴として、継ぎ口や飾り塗り以外の場所の竹本体の風合いを行かす部分の塗りは漆を塗りっぱなしにするのではなく、必ず塗ったら絹の布やストッキングなどで拭き取って「拭き漆」と呼ばれる状態に仕上げ、塗りが厚い部分では次の塗りの前に荒れを紙やすりで研ぎ出してからまた塗る。一見無駄な作業なようだが、この拭き漆と研ぎ出しによって、一見ただの枯れた竹のような風味に仕上げつつも、実際には漆がしっかり浸透した丈夫な竹竿として仕上がる。最後は生きた竹の葉のような「目（芽）」を削った芽の穴に書き込み、銘を入れる作業で終了となる（図版 13）。

つづいて「泥棒掃除」といわれる作業で、塗り端を切り整える。マスキング概念の無い和竿では重要な作業だ（図版 14）。

最後に、漆の研ぎ出しは丁寧にいき、竹の風味を残しつつ丈夫に仕上げた（図版 15）。

・完成（図版 16）

以上の工程を経て、本研究の江戸和竿手法によるテンカラ竿は制作された。

道具自体の構造として、テンカラ釣りにおける「毛鉤を振り込む」という動作を自然に行いやすい、軽さとしなやかさを重視した構造としたのはもちろん、見た目も緑の竹の若葉の目（芽）が江戸和竿らしい生きた竹を連想させる仕上がりになり、デザイン面からもこの道具が持つ、余暇を自然と一体となって過ごすという、背景文化を思わせる出来に仕上がった。

これにより、余暇などを生かしてこのテンカラ竿を使うことで、自然に遊び仕事としてのテンカラ釣りに触れられる筈である。

#### 第4節 和竿手法によるテンカラ竿の種類 ―印籠作りと並継ぎの比較、実釣、修理―

実際に複数の竿を制作したが、細かに作り方を変えたため、その使用感は様々であった。

そうした使用感から、実際にテンカラ釣りを強く伝承し得るテンカラ竿を選別した。

まず、木曽地方におけるテンカラ釣り最大の特徴である、狭い急流の沢を登りながら、一日中繰り返す毛鉤の振り込みにより適した竿を選ぶこととした。その際には竿全体が軽く、また、竿の先3分の1ほどの位置に曲がりの中心が来る、やや先調子で柔軟性が高い竿を選抜した。通常のエサ釣りやコロガシ釣りでは、竿の中程で曲がる、硬めの胴調子の竿が重用される<sup>27</sup>。しかし、テンカラ竿では簡単に曲がるほど柔軟性に富んだ先調子の竿が毛鉤を軽やかに振り込み続けるには大切であると考えられる。

作り方にも注意を払った。江戸和竿には、大きく分けて印籠作りと並継ぎの二つの継ぎ方がある。その両者の技法を含む複数の竿を実際に制作し、数ヶ月間の中期的日常使用の実釣と破損、修理を経て、どういった竿がよりテンカラ竿に相応しいかを考察してみた。

言うまでもなく、竿は繊維の束の弾力を持って力を分散させることで魚にかかる力を小さくし、粘り強くトルクを出す事で魚を疲れさせて釣り上げる道具だ。従って、その材料特

性上、繊維の束が使用と共にやがて解れて行き、いずれ傷んで折れるのは必然である。

元々江戸期には消耗品として使い捨てられてきた和竿ではあるが、グラスファイバー製の竿の登場以降は、修理しつつ繰り返し使えることに再注目し、グラスファイバー製やその後のカーボンロッド製品に勝る特性としてきた<sup>27</sup>。

従って釣り竿は必然的に壊れるものであり、遊び仕事の余暇での生活の一部としての利用を考えれば、修復の可否や容易さも重要なポイントだ。その修復特性を確認するため、使用によって折れた竿とその修復の比較から、よりテンカラ竿に適切な竿を考察してみたい。

印籠作りとは、江戸住まいの武士、松本東作（あるいはその知人の利右衛門）が考案したとされている継ぎ方で一回り細い矢竹を継ぎ目に使う事で、竿全体に自然なテーパードのかかった形状を維持したまま継ぎ竿を作り上げる手法だ。この手法によって、複数の竹から作り上げるだけでなく、一本の竹を余すところなく使う事も出来るようになった<sup>27</sup>、（図版 17）。一方、並継ぎとは、印籠作り以前からある手法で、太さの異なる竹を継ぐため、一本の竹から材料を取る場合には最低でも 2 節半は間を飛ばして継ぐ必要があるため無駄が多く、見た目もどうしても継ぎ目に段差の出る手法だ。しかし、太さの異なる複数の種類の竹や竹以外の材料をも自然に継ぐことが出来るという特性もある為、現代においても主流の継ぎ方の一つである。ごく自然に鯨の髭や、現代ではカーボンロッドを継ぐことが出来るため、日常使いの竿に多用されている<sup>27</sup>、（図版 18）。

日常使いをして実釣してみた結果、印籠作りの竿は、ナイロンの道糸を使っている分には何の問題も無かったが、馬の毛をより合わせた馬素によるキャストイング（毛鉤の振り込み動作）を行った際に、たった一度の使用で折れてしまった。これは、馬素は水に濡らして柔軟性を出してから使う使用方法であるため使用時の重量が重く、鞭のような動きで毛鉤を飛ばそうとする際の衝撃が思った以上に大きく竿の継ぎ目に集中したためと思われる（図版 19、

20)。

これに対して並継ぎの竿は2020年3月の完成から4ヶ月以上にわたって十数回の使用に耐え、40センチクラスの大物のニジマスも軽々と上げるほどに極めて順調であったが、同年7月末に雷雨の日に釣りに出かけたところ、穂先の根元の加工部分の漆を塗っていなかった部分に水が浸入し、そこから乾燥した竹が膨らみ、その膨張で、通常サイズの魚がかかっただけではぜるようになり折れてしまった(図版21)。

修理について見てみると、印籠作りの折損は、鉄芯が入っているため完全には折れきらず、折れた竿の先を失うことはなかった。修理方法としては、鉄芯のみを残してのこぎりで印籠芯を切除し、鉄芯をペンチで引き抜いた後、従来の印籠芯よりも一回り太いドリルで折損箇所を加工して、一回り太い印籠芯に置き換えることで修理を行った(図版22)。

これに対して並継ぎの竿の折損は、完全に折れ飛んでしまい、魚が糸を持って川に走り出してしまったため、穂先と道糸の回収が大変であった。また、折れた根元は水を含んで完全に詰まってしまい、修理のために持ち帰ったときには、水分を含んだ楔のようになり、穂持ち(穂先を差し込む下の段の節)のつなぎ目を内圧で割り裂いてしまっていた。この為、並継ぎ竿の修理としては、外から割り裂けた部分をのこぎりで切断し、飾り塗り部分を短くする形で継ぎ口のみを再度漆で補修して修理することとなった(図版23)。また、穂先に関してはあり合わせの古い竹の穂先(初代東光制作)から削って作り直し、根元の加工部分までしっかりと漆を塗りなおした。

両竿共に、修理の際に、それまでの使用で気になった突起などの違和感や曲がり、尾栓の不具合、漆の剥がれなども修復したため、修理後は元々以上に快調に使う事が出来るようになった。

以上から、印籠作りの折損は非常に発生しやすいが、破損箇所が印籠芯に集中するため、修復が容易である事が多い、と言ってもいいのではなかろうか。

これに対して、並継ぎの折損は発生しにくい、発生時には本体自体の破損となるため、切り詰めによる恒久的な機能ダメージが残る事が多いのでは無いかと考えられる。

この結果から考えるに、周囲に容易に修理が出来る環境がある場合や「一生もの」の大切な道具として修理を前提にしている場合には印籠作り、壊れにくい日常使いを前提とした場合には並継ぎが選択されるべきだ。漆工による和竿修復は材料や道具自体揃えにくいので、本論のテーマとなるような遊び仕事を意識したテンカラ竿をしつらえる際には、一般的には江戸和竿手法による、軟らか目の先調子の並継ぎ竿を選択すべきだろう。

### 第3章 テンカラ竿試作の成果と、タケフナイフビレッジでの文化伝播

#### 第1節 試作の成果

本試作の大きな成果として、本テンカラ竿の創出によってテンカラ釣りの意味や在り方を見直し、そのエッセンスを抽出できたのではないかと考える。

道具作りの工夫によってテンカラ釣りの最小限を道具自体が伝えるという考え方は、テンカラ釣りという文化活動を総体的且つ参加的に分析することとなり、この試みは概ね成功したのではないだろうか。また、実際の釣り場の漁獲量の推測というフィルタリングによって、テンカラ釣りという平和的な釣り文化の本質を再定義出来たのも大きな発見だ。副次的効果として、道具の形状のみならず、その歴史的経緯やそれが使われるシチュエーションを文献と試作の両面から検証出来た事も大きな成果だ。特に、第1章で示したように遊び仕事、マイナー・サブシステムとしてのテンカラ釣りの再発見はこの検証による成果であろう。

いずれにしても、ここまでの研究で、釣具による釣法の伝承というテーマの重要性について大きく踏み込めたのではないだろうか。今回試みた人と人の直接伝授に頼らない、道具を介しての技能文化・地域文化の伝授は、たとえ地域世代の断絶や災害による環境の変化など

で地域文化が途絶えたとしても、使用されたその道具さえ残っていれば元の文化が復活する可能性がある、という意味合いがある。これは、急速な人口激減を迎える中、過去の歴史を現代的な美しい思想に改編させずに平和文化を発展させ維持伝承すること、即ち、吉田大作が京都伝統文化イノベーション研究センター報告書で語ったように、伝統文化にイノベーションを起こし次の世代へ継承することが喫緊の課題である我が国日本にとって、非常に重要なことではないかと考える<sup>32</sup>。

## 第2節 タケフナイフビレッジ鍛冶師のテンカラ釣り技法の変化

また、道具による文化伝承の一例として、本研究におけるナイフ部分の指導を受ける際に、タケフナイフビレッジ協同組合の山本直、鳩野憲志朗両鍛冶師に制作中の和竿や毛鉤を見せたところ、本研究の試作のいくつかを欲しいと依頼されたことが挙げられる。

比較的大物を釣ることの多い山本鍛冶師には並継ぎの軽量の長尺テンカラ竿を、若く、溪流に踏み入ることの多い鳩野鍛冶師には印籠作りの極端に短いテンカラ竿を制作した（図版 24, 25）。

これは見方を変えてみると、道具を通じて特に言葉による伝授を経ることなく、今までは重めの毛鉤竿をエサ釣りの少ない回数で振っていた越前武生地域の人々に、軽い竿を長時間繰り返し手早く振り続けるスタイルの木曾テンカラ釣り手法が道具を介してごく自然に伝承されたわけであり、このように、制作研究途中でありながら、既に道具による自然伝承を成し得ているのが、今回道具そのものに文化伝承の役割を担わせる事を試みた、非常に大きな成果であるといえる。

ここから、このテンカラ竿の譲渡を決めた2名の鍛冶師に「竿を軽く振ってもらった時の感想」、また「和竿の内的一本を貰っても良いと思った理由」「竿をさわってみてテンカラ釣りへの興味や理解が深まったか」を中心にテンカラ釣りの自然伝授についての質問をした。

名門、浅井打刃物の後継者であり浅井丸勝の銘を受け継いだ山本打刃物の親方、山本直鍛

冶師は竿を軽く振ってもらった時の感想として下記のように述べた。

「今まで使った、既製品や、改造した毛針竿を、使って、自分自身が良いと思う毛針竿を振り比べて感じだと、穂先が、カーボンなので、先重りが竹竿にしては、無いので、とても良い感じですよ。節を抜いているので、西洋式毛針竿の六角バンブーロッドなどと比べても全体総重量は軽くて良い」(山本直鍛冶師)

このように、山本直鍛冶師は、同氏が得意な西洋式のフライフィッシングロッドと比較しての感想を述べている。また、和竿の内の一本を欲しいと思った理由として、従来同氏が使っていた郡上竿が中抜きしていないために非常に重く、一日中は振り続けられないのに対し、今回のテンカラ竿は非常に軽く仕上げてあることを指し下記のように述べた。

「今回、手塚氏の製作した竹のテンカラ竿は、今私が求める竹のテンカラ竿の全ての条件を全てクリアする竹竿なので、是非とも使いたいですね」と述べている。竿をさわってみてテンカラ釣りへの興味や理解が深まったか、という質問に対しては「穂先をカーボンにする事により、竿を持った時の持ち重りが減り、同じ重さでも竿の重心が竿尻にいくので、軽くなる！これは、一日中振り続けるテンカラ竿にとってとても重要な要素です！」(山本直鍛冶師)

と、以上のように、山本鍛冶師には竿を欲しくなった理由である軽さと合わせ、それによるテンカラ釣りの手法そのものの変化をお話し頂いた。また、今回のカーボンを使った工夫にも大いに賛同をして頂けた。

加茂刃物製作所所属の鳩野憲志朗鍛冶師は、竿を軽く振ってもらった時の感想として下記のように述べた。

「軽い。(鳩野鍛冶師が元から持っている)郡上竿は中抜きがしていないため重い」

(鳩野鍛冶師)

ここからは、重量の軽さが高評価に繋がったことがわかる。

また、和竿の内の一本を受け取った理由として下記のように述べた。

「しっかりとした和竿を使ってみたいため。正直、郡上竿は重くて一日振れない。  
あと作りがそんなに良くないからか、実釣していて穂先が飛んでいくことがあった。  
現在所持している竿が溪流で使用する時に長いと思うことがあるため短い竿が欲  
しかった」(鳩野鍛冶師)

と、ここでもやはり重量を気にした意見を述べている。

竿をさわってみてテンカラ釣りへの興味や理解が深まったかという質問に対しての回答  
は下記であった。

「自分の所持しているテンカラの和竿と比べて全く違う。ということは理解でき  
た。しかし実際に溪流で使って。魚を釣り上げなければ感触はわからないため、興  
味・理解は本当の意味で深められない」(鳩野鍛冶師)

と、返答を保留した。

更に、鳩野鍛冶師は従来の和竿に対して追加意見も下さった。

「私たち刃物職人の作った包丁は値段が多少高いが、量産品より明らかに切れ味と

いう点で勝っており実用性が高い。故に刃物職人はこれから先、数年は大丈夫と思っている。しかし和竿（郡上竿）は（本研究の竿に比べて）どうだろう、操作性（しなり・重量・仕舞寸法）メンテナンス性と実用性を考えると量産品の方が良いと考えている。コレクションとして話のネタとして持っている面白いけど、積極的に購入して使っていこうとは思わない。（郡上）和竿職人さんと話すのは面白かったが、商売としては大変だろうなと思った。むしろ和竿をつかったからこそ、量産品を越える実用性、もしくは釣り味の良い竿はあるのか？（現代竿の方が実用性に優れるのでは？）と感じている」（鳩野鍛冶師）

と、鳩野鍛冶師は、市販の和竿の実用性やその商売としての存続性に疑問を呈している。鳩野鍛冶師は鍛冶師の前職が修士免許を持つ元教員であり、伝統の伝授とその継続に対しての明確な問題意識のある回答であった。この問題意識はまさにテンカラ竿制作のきっかけとなった「失われつつあるテンカラ釣りの道具での伝承保存」に生業としての道具職人側からアプローチする意見であり、実際にその道具を使う文化の継承を重視して、伝統材料よりもカーボン竿素材やステンレスナイフ素材を積極的に取り入れた本論と見解を共にしている。

伝統工芸士でもある両鍛冶師の意見は、もの作りのプロとしての意見であり、このテンカラ竿が日本の伝統的な釣法を扱う道具として十分な水準に達していることを証明していると言っていいだろう。また、世界観の伝達、伝承という点でも、それまで鍛冶師二人が持っていた美しさ優先の硬くて重い郡上竿と比較して、木曽谷地域でのテンカラ釣りに根ざしたこの軽くて軟らかいテンカラ竿が、従来所有の郡上竿とは明らかに違う釣りの方法を実現出来る竿であるという意図が伝わっている点に注目したい。

## 終章

以上から本論の結論を述べたい。

江戸和竿手法にて、信州木曽地方の、軽く、柔軟性に富んだ先調子の竿を意識して制作された本テンカラ竿は、前述の溪流での日常使いの他、都会の溪流とも言える埼玉県立川越水上公園における冬季プールフィッシング実釣の結果においても成果を上げた（図版26）。本研究の結果制作されたテンカラ竿は、素晴らしく便利で使いやすい完結したテンカラ釣り道具であり、そこから、道具そのものからの文化伝承が期待される。前述のタケフナイフビレッジの鍛冶師二名の意見と合わせても、本研究で制作した江戸和竿手法によるテンカラ竿という道具からのテンカラ文化の伝承やその世界観の伝達は極めて順調であると思われる。

特に、現代においては市民プールを冬のマス釣り場として利用したプールフィッシングが盛んだ。そうした場面において、このテンカラ竿があれば、自然に、必要なだけ釣って食べるテンカラ釣りの文化が道具から自然に伝承され、使用者がその技術を身に付け、引いては、来客やバーベキューなどのちょっとした折りに、魚を釣って持って帰る、一種の催事的／祭事的な食習慣を身につける可能性が高い。

この研究制作活動によって、その生活の伝承保存や文化の継承に寄与し、現代人の生き方、特に伝統文化や日本旧来の食文化などを重視する生活の形成において、余暇と食材採集を結びつけた「遊び仕事」としての新たな世界観を伝承し得ることを証明できたのでは無いただろうか。また道具自体のデザインや制作中の工夫によって、道具の所属していた文化自身の断絶を乗り越えて、道具そのものからの非言語的体験による文化伝承は可能である、という知見を得た。

無論、大衆向けの薄く広い効果をもたらす文化伝承も大切ではあるが、それとは異なり、その一本の竿という道具を入手した人のみに深く決定的な非言語的文化伝承をもたらすのは、一つのアートの的なアプローチとして有効なのでは無いただろうか？

事実、伝統ある釣り雑誌「つり人」にも、今回の取り組みが小さいながらも紹介されたことは、本研究の方向性が世間的にも必要性の高いものである可能性が高いことを指し示すだろう<sup>33</sup>。

本試作完成後の課題として、仙台竿など、テンカラ釣り以外の日本各地の伝統釣法に対しての調査アプローチの必要性があるだろう。釣竿は、水辺で使う竹製品という、ある種腐敗や破損を前提とした明確な消耗品としての性質を持つものであり、単に制作の過程や製品を保存するのみではやがてその付帯文化は必然的に消失し、いかにガラスケースに納め、静的な保存を厳密に試みようとも、竹竿そのものも二百年を待たずに崩れ去る。そのため、常に各地域の特性の強い釣竿を作り続ける形での各地域の文化の動的な保存の必要性があるとも言える。今後はテンカラ釣りに留まらず日本各地の様々な地域・魚種の釣法を調査し、それを後世に伝承しうる釣具・文化伝承道具の在り方についての研究を進めて行きたい。特に、日本の文化は街道沿いに発展を遂げてきたが、この街道が断層上の破碎帯、自然倒木帯を利用して利用され続けてきた経緯から、災害と文化、特に食文化の伝播との間には密接な関係性があるのでは無いかと考えられる<sup>34</sup>。災害が繰り返される現在の我が国の状況を踏まえ、その生活維持面での緩やかな解決策への模索の一環としても、こうした必然的に災害の多い断層沿いの交易路としての街道と、人口増減時に活躍する特殊な食文化行動である「遊び仕事」としての地域釣法、その道具との関連性に踏み込んで行きたい。

## 謝辞

本報告書を執筆するにあたり、指導教官の伊達仁美教授、松井利夫教授からは多大な助言を頂戴した事を、まずは厚く感謝申し上げたい。また修士ゼミ指導では上村博教授、春日部幹先生には制作面でのアドバイスを頂き、感謝申し上げたい。また、本製作に関わる刃物作りのご指導を頂いたタケフナイフビレッジ協同組合の皆様、特に浅井打刃物の故浅井正美鍛冶師、その後継者の山本打刃物の山本直鍛冶師、加茂打刃物製作所の鳩野憲志朗鍛冶師には、大きな感謝を捧げたい。特に山本、鳩野両鍛冶師は本研究で制作したテンカラ竿を引き受けてくださり貴重な意見を頂いた事には深く感謝したい。和竿作りのご指導を頂いた大川ラボの大川清一和竿師には和竿教室の枠を越えて東作系東光流江戸和竿の技術を隠すところなく伝授頂き、多大なる感謝を申し上げたい。旧京都造形芸術大学大学院（通信）芸術研究科芸術環境専攻芸術環境研究領域芸術教育分野松井ゼミの皆様には様々なアイデアを頂き大いに感謝したい。特に長谷川千種氏には「遊び仕事」の概念を教えて頂いた事でこの研究のターニングポイントとなった事を強く感謝申し上げる。最後に、映像・デジタルコンテンツ制作会社である有限会社アイラ・ラボラトリの皆様は研究制作やその撮影に大いに協力してくださった事に感謝したい。特に同社橋本修平氏には誤字修正を多数頂き、深く感謝申し上げる。

注釈

<sup>1</sup>岡本憲幸「維持困難な地域文化とその「伝統」:岡山県の郷土玩具・泥天神を事例に」人文地理学会大会研究発表要旨、人文地理学会、2006 年、p,11

<sup>2</sup>金谷美和「文化の消費--日本民芸運動の展示をめぐって」人文学報 04490274 01-77、京都大学人文科学研究、1996 年、pp,63-97

<sup>3</sup>福祉のひろば 編著「めざせ! 伝統工芸士」福祉のひろば 92(457),2007 年 pp,1-4

<sup>4</sup>山本素石『山釣り・山本素石傑作集』朔風社、1992年

<sup>5</sup>笹本正次ら「川・湖沼の恵と縄文人」長野県立歴史館編集『信州の風土と歴史 23 川』長野県立資料館刊、2017 年、pp,36-37

<sup>6</sup>Yvon Chouinard, Craig Mathews, Mauro Mazzo, James Prosek『シンプル・フライフィッシング: テンカラが教えるテクニック』地球丸 訳 Patagonia Books、2014 年

<sup>7</sup>管理釣り場ポータル「テンカラができる管理釣り場 (2019年10月11日閲覧)

[https://www.turinavi.info/sp\\_tenkara/](https://www.turinavi.info/sp_tenkara/)

<sup>8</sup>桑原玄辰・杉本英樹・高崎武雄『「溪流の釣」入門から研究へ』西東社新書版、1965 年

<sup>9</sup>平成30年度放流実績 木曽川漁業協同組合 (2019年10月11日閲覧)

<https://park7.wakwak.com/~kisogawa/info.html>

<sup>10</sup>中村 智幸, 土居 隆秀「溪流におけるイワナ発眼卵放流由来群の生残, 成長, 密度および現存量」日本水産学会誌 75 巻 2 号、2009 年、pp,198-203

<sup>11</sup>統計ステーション長野「長野県統計情報データ毎月人口異動調査 市町村別人口と世帯」(2019年10月11日閲覧)

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kisoho/tokei/documents/01jinko.pdf>

<sup>12</sup>児玉幸多『近世交通史料集 5 中山道宿村大概帳』吉川弘文館、1971

<sup>13</sup>道尾 淳子「中山道宿場町67宿における旧街道の道路特性に関する研究: 道路幅員と道路の種類にみる旧街道の今日的位置付け(建築・環境デザイン)」芸術工学会誌 58(0)、2012年 pp,43-50

<sup>14</sup>統計ステーション長野「長野県統計情報データ毎月人口異動調査市町村別人口と世帯」

(2020 年9 月18 日閲覧)

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kisoho/tokei/documents/01jinko.pdf>

<sup>15</sup>つり人社書籍編集部 (著),『長野「いい川」 溪流ヤマメ・イワナ釣り場』つり人社、2015 年

<sup>16</sup>杉本英樹 「テンカラの周辺 (木曾 & 関西のテンカラ事情)」 『釣の友』昭和61 年7 月号、釣りの友、1986 年、pp,188-190

<sup>17</sup> 三橋 俊雄「遊び仕事を通したSubsistence の再考(<特集>デザイン思考)」一般社団法人 日本デザイン学会デザイン学研究特集号 20(1)、2012 年、pp,28-33

<sup>18</sup>一般社団法人農山漁村文化協会 「農文協の主張」 (2020 年9 月18 日閲覧)

<http://www.ruralnet.or.jp/syutyu/2006/200609.htm>

<sup>19</sup>沢田眉香子「民藝基礎知識」、美術手帳第1075 号2019 年4 月号、2019 年、pp,44-45

<sup>20</sup>鞍田崇「トピックからたどる「民藝」とその周辺」、美術手帳第1075 号2019 年4 月号、2019 年、pp,52-57

<sup>21</sup>軸原ヨウスケ 中村裕太「民藝の周辺-1 アウト・オブ・民藝 民芸運動のはぐれもの」美術手帳第1075 号2019 年4 月号、pp,58-65

<sup>22</sup>塚口 眞佐子「モダンデザインの背景を探る 1920 年代から30 年代 諸事情(その4)バウハウス周辺と雑誌die neue linie」大阪樟蔭女子大学研究紀要 21860459 大阪樟蔭女子大学、2011年1 月、pp,139-155

<sup>23</sup>親鸞、金子大栄校注『歎異抄』、岩波書店、1981 年7 月

<sup>24</sup>ジョルジュ・ネラン『おバカさんの自叙伝半分―聖書片手にニッポン40 年間』講談社文庫、1992 年

<sup>25</sup>東京都荒川区ひぐらし小学校「食育実践レポート (8) ニジマスをおいしく楽しく味わいながら―ひぐらし小学校の食育実践」食育フォーラム／健康教育研究会 編 6 (11) 通 68、2006年、pp,62-65

- <sup>26</sup>内外教育 編著「ニジマス活用して特別授業—東京都江東区立第二辰巳小学校」 内外教育 (5749)、2007 年、P.7
- <sup>27</sup>仙台市教育委員会 2010 「仙台市文化財調査報告書375：仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書 仙台釣竿・仙台御筆4」 仙台市教育委員会、2010 年、pp,1-66
- <sup>28</sup>海野 徹也「生物材料インデックス 日本人の心の魚,クロダイ」 生物工学会誌、日本生物工学会、2013年、91巻、p10
- <sup>29</sup>植月学「甲州竿にみる甲州釣り文化の一様相」 山梨県立博物館研究紀要/山梨県立博物館 編 11, 2017 年、pp,1-12
- <sup>30</sup>長野県の情報【E-CURE】「寝覚めの床 上松町」(2020年9月18日 閲覧)  
<http://www.i-turn.jp/nezame-no-toko-urashimatatou.html>
- <sup>31</sup>浦壮一郎「消えゆく江戸和竿」 週間金曜日 9(1)(通号353)、2001年、pp,40-42,
- <sup>32</sup>吉田大作「伝統工芸を取り巻く課題と今後の研究テーマ」 2018 年度 京都伝統文化イノベーション研究センター報告書、京都造形芸術大学、2019 年、pp,66-70
- <sup>33</sup>月刊釣り人編集部(著)「和竿が身近になるサオ作り教室」 月刊釣り人、No892、2020年10月号、pp26-27
- <sup>34</sup>棚瀬久雄『フォッサマグナ・中央構造線を行く-断層沿いの交易路と文化流通の軌跡-』 創栄出版 星雲社、2010年

## 図版一覧

(番号、作者名、タイトル、技法、年代、所蔵先、出典)

(図版において撮影者氏名のないものは、筆者制作物を筆者自身の撮影)

(図版 1) 木曾川上流の風景 2011 年 長野県木曾町日義地区

(図版 2) 工程 1「伐り出し・晒し」 2019 年

(図版 3) 和竿工程 2「切り組み」 2019 年

(図版 4) 和竿工程 3「撓め・殺し」 2019 年

(図版 5) 和竿工程 4「削り」芽の削り出し 2019 年

(図版 6) 和竿工程 4「削り」節の削り 2019 年

(図版 7) 和竿工程 4「削り」継ぎ口の工作 2019 年

(図版 8) 和竿工程 4「巻き」継ぎ口の絹糸巻き 2019 年

(図版 9) 和竿工程 4「瀬締め」継ぎ口の瀬締め 2019 年

(図版 10) 和竿工程 5「継ぎ」 2019 年

(図版 11) 和竿工程 6「調子」 2019 年

(図版 12) 和竿工程 6「尾栓」 2019 年

(図版 13) 和竿工程 7, 8「塗り」「仕上げ」 2019 年

(図版 14) 和竿工程 7, 8「塗り」「仕上げ」塗り端を切り整える泥棒掃除をする 2019 年

(図版 15) 和竿工程 7, 8「塗り」「仕上げ」 2019 年

(図版 16) 和竿工程「完成」 2019 年

(図版 17)「印籠作り」江戸和竿手法テンカラ竿 2020 年

(図版 18)「並継ぎ」江戸和竿手法テンカラ竿 2020 年

(図版 19)「印籠作りの折損」 2020 年

(図版 20)「印籠作りの折損」(詳細) 2020 年

(図版 21)「並継ぎの折損」 2020 年

(図版 22)「印籠作りの修復」 2020 年

(図版 23)「並継ぎの修復」 2020 年

(図版 24)「山本鍛冶師の竿」 2019 年

(図版 25)「鳩野鍛冶師の竿」 2019 年

(図版 26)「埼玉県立川越水上公園におけるプールフィッシング」 2019 年

## 図版

本図版は筆者制作物を筆者自身が撮影したものである。



図版 1) 木曽川上流の風景（長野県木曽町日義地区）

テンカラの発祥地木曽川上流域の水量は少なく、

増水期でも雨天以外は歩いて渡れる程度の水量

しかない。漁業資源総量も少ない 2011 年



（図版 2）工程 1「伐り出し・晒し」工程

切り出してきた各種の竹を 3 ヶ月以上乾燥させて

いる 2019 年



(図版3) 工程2「切り組み」

乾燥させた竹を大まかに竿の長さに切る 2019 年



(図版4) 工程3「撓め・殺し」

竹を熱で柔らかくし、形や丸みを整える 2019 年



(図版5) 工程4「削り」芽の削り出し

芽や棘などを削り取る

2019 年



(図版6) 工程4「削り」節の削り

節を紙やすりで磨き込んで角をとる 2019 年



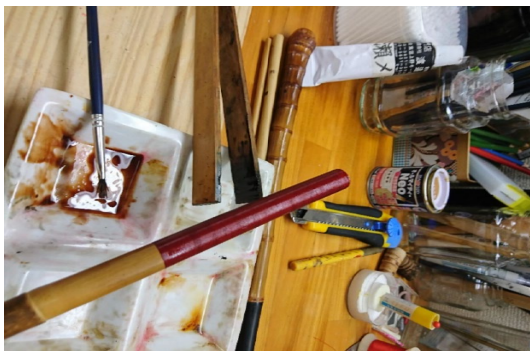
(図版7) 工程4「削り」継ぎ口の工作

継ぎ部分の皮を剥ぎ整形する

2019 年



(図版 8) 工程 4「巻き」 継ぎ口の絹糸巻き  
皮を剥いだ部分に絹糸を巻く 2019 年



(図版 9) 工程 4「瀬締め」 継ぎ口の瀬締め  
巻いた糸を瀬締め漆で塗り固める 2019 年



(図版 10) 工程 5「継ぎ」  
継ぎ部分を棒ヤスリで整え、実際に継ぐ 2019 年



(図版 11) 工程 6「調子」

棒ヤスリの角度を変えながら継ぎを整える 2019 年



(図版 12) 工程 6「尾栓」

竿の各段の継ぎ側の穴を竹細工で閉じる 2019 年



(図版 13) 工程 7, 8「塗り」「仕上げ」

3 ヶ月～半年ほどかけ望んだ模様が出て凹みがなくなるまで漆を塗り重ねる 2019 年



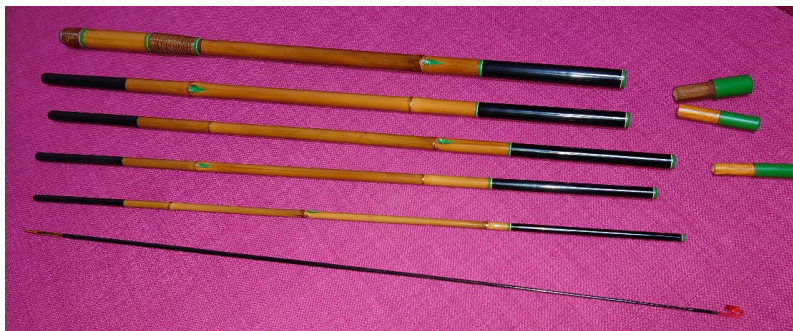
(図版 14) 工程 7, 8「泥棒掃除」

塗った漆の端を切り整える 2019 年



(図版 15) 工程 7, 8「塗り」「仕上げ」

最後に拭き漆で全体につやを出す 2019 年



(図版 16)「節揃いテンカラ竿」江戸和竿手法テンカラ竿

畳み長さ 65cm、全長 3m30cm

竹、絹糸、漆、リリアン糸

2019 年

以上で和竿工程の「完成」。二節揃えの鮒竿作りのテンカラ竿



(図版 17)「印籠作り」江戸和竿手法テンカラ竿

折り畳み 85cm 全長 3m30cm

竹、絹糸、漆、リリアン糸、鉄パイプ

2020 年



(図版 18)「並継ぎ」江戸和竿手法テンカラ竿

折り畳み 85cm 全長 3m30cm

竹、絹糸、漆、リリアン糸

2020 年



(図版 19)「印籠作りの折損」

実際に竿を使って折損を経験したところ。印籠作り  
では鉄芯のおかげで完全に折れ飛ぶ事はない

2020 年



(図版 20)「印籠作りの折損」(詳細)

印籠作りの折損部分の拡大。竹は完全に折れてしまっているが  
中の鉄芯でつながっていることがわかる

2020 年



(図版 21)「並継ぎの折損」

並継ぎの場合、完全に折れて継ぎ部分の中に残ってしまった。

中で折損部位が水を吸ってしまい、漆の外塗りも剥離している。

2020 年



(図版 22)「印籠作りの修復」

印籠芯の中子はひと回り太くなるが、一見何も問題無く  
元通りとなる。一方並継ぎ（左端）は明らかに短くなっ  
ている

2020 年



(図版 23)「並継ぎの修復」

並継ぎの破損は、思い切った切断修理が必要となる 2020 年

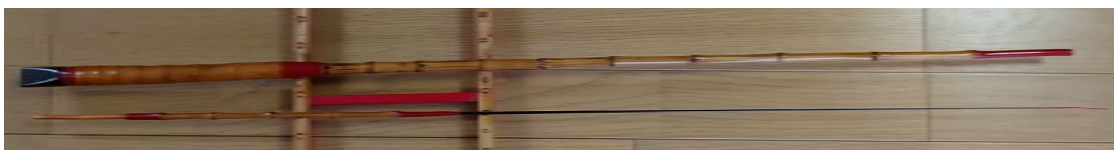


(図版 24)「山本鍛冶師の竿」

畳み長さ 95cm 全長 3m50cm

竹、絹糸、漆、リリアン糸、カーボン繊維（替え穂先部分のみ）

2019 年



(図版 25)「鳩野鍛冶師の竿」

畳み長さ 110cm 全長 2m10cm

竹、絹糸、漆、リリアン糸、カーボン繊維（補強箇所を使用）

2019 年



(図版 26) 埼玉県立川越水上公園におけるプールフィッシング

2019 年

## 発表論文リスト

手塚一佳「伝統釣法の伝承と道具及びその世界観に関する制作と研究」京都造形芸術大学大学院芸術環境専攻芸術環境研究領域芸術教育分野修士課程 修士研究報告書、2020 年 3 月

Traditional fishing method "TENKARA"

as ASOBI-SHIGOTO (Minor Subsistence)

- Research and production of folklore and folk crafts-

Kazuyoshi TEZUKA

This research is the Traditional fishing method "TENKARA" as ASOBI-SHIGOTO (Minor Subsistence) - Research and production of folklore and folk crafts-.

ASOBI-SHIGOTO is a minor subsistence advocated by Mihashi et al., Which is different from the main business and is held only when there are traditional festivals or important visitors.

In this research, in order to reconsider the way of life of modern people, I researched and produced tools and ways of life. In this study, I aimed to encourage people to use their leisure time to develop a lifestyle that emphasizes traditional culture and traditional Japanese dietary habits. Therefore, in this study, I focused on TENKARA fishing, which is a traditional fishing method in the central Shinshu Kiso area of Nagano prefecture. And I thought about how to pass it on to the next generation. Then, I investigated the method of crafting Japanese rods for TENKARA fishing using the Edo Japanese rod crafting method and other traditional techniques. As a modern-day problem, there is a severance of traditional cultural traditions such as local lifestyles. The change in consciousness of the producers involved in such traditional culture is the cause of the disconnection.

Another major problem is the consumption of culture through the commodification of tools and local traditional events.

In many cases, “maintaining traditional culture” is difficult without the use of commercialized Folk craft. However, in modern culture with advanced economic development, it is easy to lose sight of the traditional culture that is essential because commercialization that emphasizes sales proceeds simply by making Folk craft.

Therefore, I thought that as a useful method for continuing the traditional culture, craftsmen who make tools and merchants who sell them should add the value of cultural tradition to the Folk craft or other tools in advance. Folk implement creators need to create a shape that conveys the culture of using the tool nonverbally in the design of the folk implement that they made.

When using the folk implement so that it is easy to use, it is important to create it so that it becomes the movement of the traditional culture to which the folk implement belongs.

Actually, in this research, I crafted a TENKARA rods and let it be used by for people in other areas.

As a result, the TENKARA fishing culture has been handed down to two Fishing lover traditional blacksmith, via Nonverbal and Just by Tools.